

## 友達と協力し合って遊ぶ園児の育成

### ～協同性を育む活動の工夫を通して～

石垣市立あらかわこども園

保育教諭 石垣美香

#### I テーマ設定の理由

近年、少子化や核家族化、情報化等社会が急激に変化し、人々の価値観や生活様式が多様化すると共に人間関係が希薄化しつつある。幼児においても、ゲーム等室内遊びが多く、自然・生活体験が少ない等の傾向が見られ、生活時間の大半を過ごす幼稚園、こども園、保育園等の役割は大きいと考える。

「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」(平成30年4月施行)では、従来の5つの領域に新たに幼児教育の中で育みたい3つの資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示された。幼保連携型認定こども園として特に配慮すべき事項に、「満3歳以上の園児については同一学年の園児で編成される学級による集団活動の中で遊びを中心とする園児の主体的な活動を通して発達や学びを促す経験が得られるよう工夫すること。園児同士が共に育ち、学び合いながら、豊かな体験を積み重ねることができるよう工夫すること」(抜粋)と示されている。担当する5歳児の発達の特徴には、「友達と力を合わせて遊びや生活をつくり上げる達成感を味わい、自信をつけていく」等があると記されており、これは幼児期の終わりまでに育ってほしい姿「協同性」の育ちへとつながり、小学校生活での教師や友達と協力し生活したり学び合ったりする姿につながる。

本園の園児は、自分のやりたい遊びを見つけて楽しむ姿、活動に意欲的に参加する姿、更に、5歳児には、創造性豊かで周りにある材料を使って形にして楽しんだり、観察したことを図鑑等で調べたりする姿もある。他方で、友達へ進んで声をかけられない子、集団の活動に参加できない子も見られる。保育教諭の立場から自身のこれまでの保育を振り返ると、園児が粘土、お絵描き等一人遊びをする場は充実していたが、意図的な保育において友達と関わりながら同じ目的に向かって協力してやり遂げる取組やお互いの良さを生かして遊ぶ場の設定が十分ではなかったことが課題だったと思われる。そこで、4月から園庭の草花や昆虫に興味を持って観察していた子が多く見られたことから、それらの体験をもとに園児達に遊びを考えさせたい。また、興味や関心を生かしお互いの考えを出し合い協力して遊びを工夫することでお互いの良さが生かされ、協同性が育まれると共に学びの芽を育てられるのではないかと考える。

本研究では、観察したり調べたり絵を描いたりした体験を生かして遊びが展開するように皆で話し合いをしていく。そして、グループで知恵を出し合い、工夫して遊びが展開できるような活動を設定する。保育教諭は、幼児の「やってみたい!」「どうしてだろう?」等の探求心や好奇心を認め援助すると共にグループの活動を励ます。同じ目的に向かって試行錯誤しながら最後までやり遂げる体験をすることで、協同性が育まれ友達と協力し合って遊ぶ園児の育成ができるであろうと考え、本テーマを設定した。

#### II 研究仮説

**仮説** グループでお互いの考えを出し合い、試行錯誤しながらやり遂げる活動を設定することで協同性が育まれ、友達と協力し合って遊ぶ園児が育つであろう。

### Ⅲ 研究内容

#### 1 幼児教育において育みたい資質・能力について

平成 29 年に 3 歳以上の幼児を預かる幼児施設における教育・保育について整合性が図られ、幼児一人一人の育むべき資質・能力が明確化された。その資質・能力とは、①「知識及び技能の基礎」②「思考力、判断力、表現力等の基礎」③「学びに向かう力、人間性等」であり、従来の 5 領域のねらい・内容に基づく活動において遊びを通して総合的に育てていくことと記されている。こうして育まれた幼児は、5 歳児後半になると「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(10 の姿) が顕著に見られるようになる。

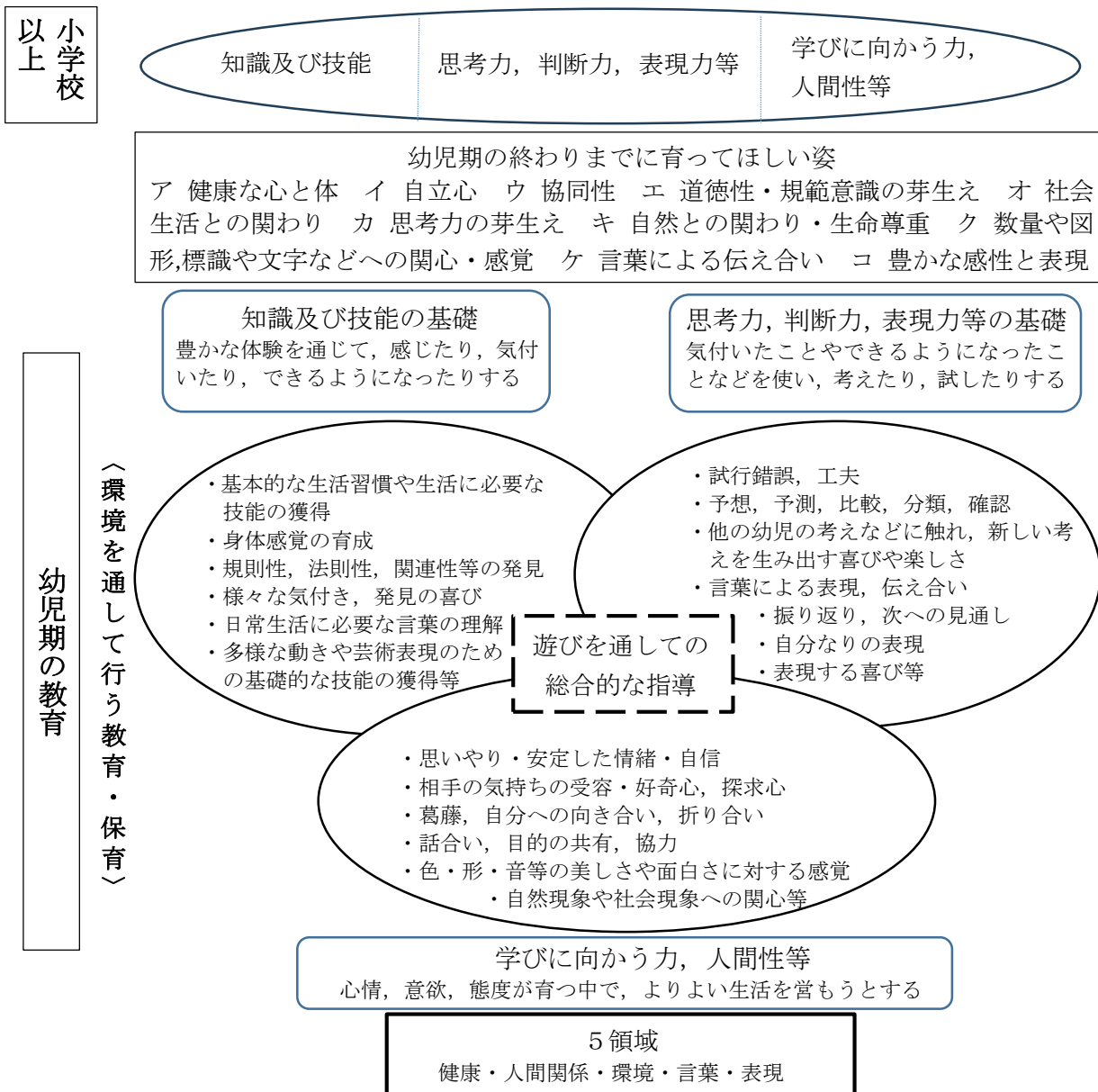


図 1 幼児期の教育において育みたい資質・能力の整理 ※「保育内容 環境」を参考に加筆

#### 2 領域「人間関係」と幼児期の終わりまでに育ってほしい姿「ウ 協同性」について

##### (1) 幼保連携型認定こども園教育・保育要領における領域「人間関係」

人と関わる力の基礎は、自分が保護者や周囲の人々に温かく見守られているという安定感から生まれる、人に対する信頼感、さらに、その信頼感に支えられて自分自身の生活を確立していくこと

によって培われる。

#### 領域「人間関係」

人との関わりに関する領域「人間関係」では、[他の人々と親しみ、支え合って生活するため、自立心を育て、人と関わる力を養う]ことを目的としている。

##### 1 ねらい

- (1) 幼保連携型認定こども園の生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。
- (2) 身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ。
- (3) 社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける。

##### 2 内容

- (1) 保育教諭等や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。
- (2) 自分で考え、自分で行動する。
- (3) 自分でできることは自分でする。
- (4) いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ。
- (5) 友達と積極的に関わりながら喜びや悲しみを共感し合う。
- (6) 自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。
- (7) 友達のよさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう。
- (8) 友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり、協力したりなどする。
- (9) よいことや悪いことがあることに気付き、考えながら行動する。
- (10) 友達との関わりを深め、思いやりをもつ。
- (11) 友達と楽しく生活する中できまりの大切さに気付き、守ろうとする。
- (12) 共同の遊具や用具を大切にし、皆で使う。
- (13) 高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ。

#### 資料1 人との関わりに関する領域「人間関係」(幼保認定型こども園教育・保育要領解説)

### (2) 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿「ウ 協同性」

#### ウ 協同性

友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。

#### 資料2 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説)

幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説によると、協同性は領域「人間関係」などで示されているように、「保育教諭等との信頼関係を基盤に他の園児との関わりを深め、思いを伝え合ったり試行錯誤したりしながら一緒に活動を展開する楽しさや、共通の目的が実現する喜びを味わう中で育まれていく。5歳児の後半には、その目的の実現に向けて、考えたことを相手に分かるように伝えながら、工夫したり、協力したりし、充実感をもって園児同士でやり遂げるようになる。協同性が育まれるためには、単に他の園児と一緒に活動できることを優先するのではない。他の園児と一緒に活動する中で、それぞれの持ち味が発揮され、互いのよさを認め合う関係がでてくるのが大切である。幼児期に育まれた協同性は、小学校における学級での集団生活の中で、目的に向かって自分の力を発揮しながら友達と協力して生活したり学び合ったりする姿につながっていく」とある。

保育教諭が園児一人一人の思いや行動などから、どんなことに心が動かされ活動しているのか推し量りながら、寄り添い励ますことで、やる気を引き出したり、同じ目的に向かって友達との関わりが生まれるよう援助したりしていくことが大切であると考え。

### 3 友達と協力し合って遊ぶ園児とは

友達と協力し合って遊ぶ園児とは、興味や関心のある遊びを通して、友達と互いに自分の思いを伝え合ったり、試行錯誤しながら協力して取り組んだりしながら同じ目的に向かって最後までやり遂げる姿であると考えられる。

このような園児の姿は、園児の興味や関心に沿った遊びが展開していけるように、「人・もの・こと」による応答的な環境が重要である。

本研究では、

人：同じ興味や関心のあるグループの園児、保育教諭等

もの：昆虫の写真、昆虫図鑑、絵本、ドキュメンテーション、小道具づくりに使う材料等

こと：ゲーム遊び、話し合いの場、クイズの問題づくり、小道具づくり、誕生会等

と捉え、園児がやってみたいと思えるような環境を構成していく。

#### (1) 園児の興味や関心について

園児の興味や関心というのは、幼保連携認定型こども園教育・保育要領では、「自分から興味をもって環境に主体的に関わりながら、様々な活動を展開し、充実感や満足感を味わうということ」、「園児の関わりたいという意欲から発してこそ、環境との深い関わりが成り立つもの」とある。

しかし、「周囲の環境が発達に応じたものでなかったり、活動に対して適切な指導が行われなかったりすれば、園児の興味や関心が引き起こされず、活動を通しての経験も発達を促すものとならない」とある。

このことから、保育教諭は園児の「やってみたい」という興味や関心を大切にするとともに、園児が何に関心を抱いているのか、何に意欲的に取り組んでいるのか、あるいは取り組もうとしているのかなどを捉え援助していくことが大切であると思われる。

#### (2) 友達と協力し合って遊ぶとは

園児が集団の中で安心して自己発揮しながら友達と関わりを深め、互いの思いを受け止めたり、時には意見のぶつかり合いや思い通りにいかない等の、葛藤を味わったりしながらも、より良い方向へ向かって協力して遊ぶ園児の姿であると考えられる。

### 4 友達と協力し合って遊びを進める園児を育成するための工夫

#### (1) 見方・考え方

平成 29 年度幼保認定型こども園教育・保育要領の改訂にあたって、「幼児期の教育における見方・考え方を示し、それを生かして園児と共によりよい教育の環境を創造するように努めることが重要である」としている。

無藤隆「今後の幼児教育とは」によると、幼児教育の見方・考え方とは、

○幼児がそれぞれの発達に即しながら身近な環境に主体的に関わり、心動かされる体験を重ね遊びが発展し生活が広がる中で、環境との関わり方や意味に気づき、これらを取り込もうとして、諸感覚を働かせながら、試行錯誤したり、思いを巡らしたりすること。

○遊びや生活の中で幼児理解に基づいた教員による意図的、計画的な環境の構成の下で、教員や友達と関わり、様々な体験することを通して広がったり、深まったりして、修正・変化し発展していくことが、大切である。

と述べている。更に、無藤氏は「主体的・対話的で深い学び」の実現のために、「直接的・具体的な体験の際、『見方・考え方』を働かせて対象と関わって心を動かし、幼児なりのやり方やペースで試行錯誤を繰り返し生活を意味あるものとして捉える深い学びが実現できているかの視点が大切である」と伝えている。そこで、本研究では、園児達の興味関心が継続している昆虫から自分達の遊びに取り入れられないか考えたり、遊びをつくったりして楽しめる場を設けていく。その過程の中で、幼児教育の「見方・考え方」を生かしながら友達と一緒に試行錯誤して取り組み、自分達

の遊びを意味あるものとしてつくりあげる充実感や達成感を味わえるようにし、学びの芽や協同性を育てていきたいと考える。

## (2) 共主体

大豆生田啓友「子どもが中心の『共主体』の保育へ」によると、主体性は、子どもにも大人にもある。主体性とは、「自分の意志や判断に基づいて、考えて行動を決定する態度(高い精神性を要する)」と記してある。

そして、大人の主体性と子どもの主体性をみていくと、大人の主体性は、自分で周辺のことまで考えて判断し、行動することができる成熟した主体性である。

しかし、子どもの主体性は、子どもが生まれて間がなく、この世の知識が少ない、すべてが新鮮で感じ方や、表現の仕方や体の機能等大人と異なる等「未成熟な部分がある」ため、大人側の配慮が必要である。「子どもとかがかわるときの基本マインドセット」(図2)では、子どもの主体性に関わる際の大人側の視点が述べられている。

この表より、大人側は、子どもの人権を大切に、より楽しいことに即応する子どもの世界に合わせて配慮した関わりが望まれる。

大豆生田啓友は、「子どもが中心の『共主体』の保育」が大切であるとし、子どもと大人の主体性の関係には、次の4つのパターンがあると述べている。

【1】と【3】の一致は問題ないと思われるが園児によっては、よく考えずに周りに合わせて「やってみたい」と言っている場合もあることに配慮が必要である。

【2】と【4】の不一致のケースは、「主張の主体性がぶつかっている」状態である。この時どちらも主張の主体性を発揮している。

不一致のケースを見ていくと、【2】の園児が「やりたくない」という主張や【4】のやってほしくないことを「やりたい」と主張した場合は、どう対応していくのか。まずは、

- ① 園児の主張を受け止め、容認してあげること。
- ② 保育者は、子どもの最善の利益は何かを考え、対話を通して、園児へ活動の良さを伝えたり、園児の主張に対して安全面等に配慮し、やりたいことが実現できる時間や場の確保をしてあげる等、園児の主張との折り合いどころを見つけていくことが大切である。

共主体とは、「生活や活動の中で葛藤や対話を重ね、折り合える方法を探る。その過程でみんなの主体性が混じり合う」ということである。本研究では、子どもが中心の共主体の保育が展開していくためには、子どもの主張を受け止め、子どもの最善の利益の考えのもと、対話により子ども自身が気持ちを切り替えて動けるように関わっていくことが求められている。

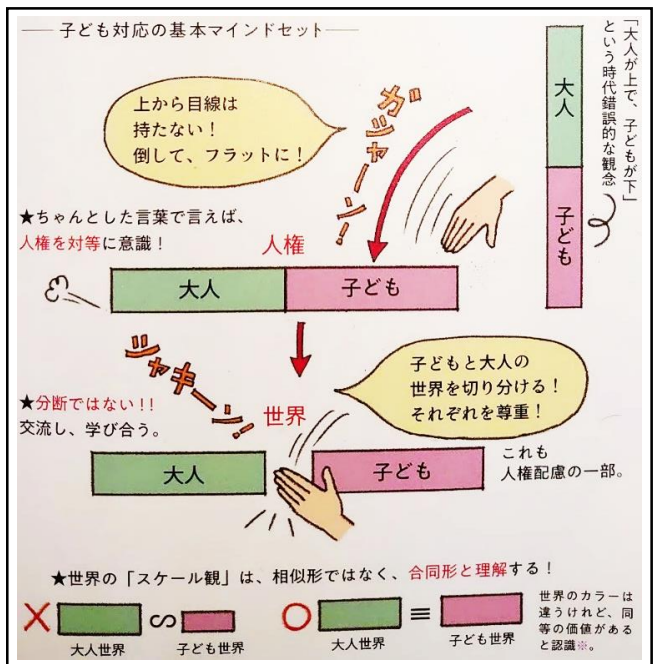


図2 子どもとかがかわるときの基本マインドセット

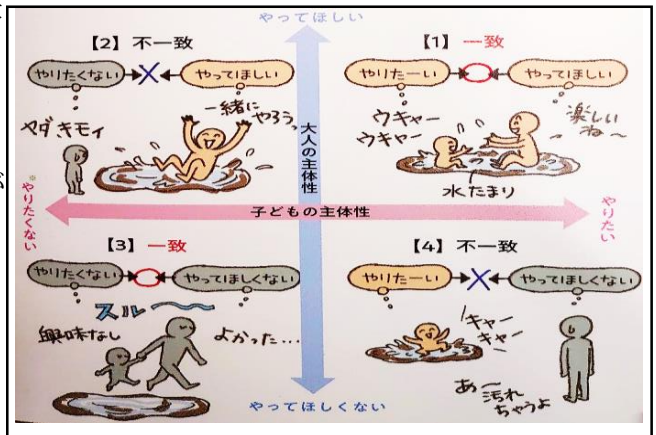


図3 主張の主体性を考えた場合の4つのパターン

※図2、図3ともに「子どもが中心の『共主体』保育より」



### (3) ドキュメンテーションの活用

大豆生田啓友, おおえだけいこ「日本版保育ドキュメンテーションのすすめ」では、「ドキュメンテーションとは、『写真つき記録』のことで、広くて深い概念である。ここでは、『保育ドキュメンテーション』と呼び、子どもの具体的なエピソードのことで、子どもの姿を振り返り、対話し、味わい、保育の質を高めるため道具である」とある。

エピソード記録では、

- ① 子どもたちの興味や関心、探求、試行錯誤、問いや気づき、友達との協力、ある子の集団への貢献など、子どもたちの素晴らしさや魅力を発見して記録していくこと。
- ② エピソード記録を取ることで、今まで見過ごしていた姿が見えるようになり、子どもへの驚き、リスペクトが起こる。
- ③ 子どもたちがもっとのめり込めるように、「明日はこういう環境を用意したい!」と子どもの遊びや学びのデザインが生まれる

とある。エピソード記録を取ることで、子ども主体の学びを生み出すためのツールになる。更に読み手の当事者の子どもにとっては、「記録してもらった」喜びと、その子の記憶に焼きつき、自信にもなっていく。読み手のほかの子どもたちにとっては、どんな活動も、自分が当事者になると「深い気づき・学び」につながっていきやすい。また、記録を見たほかの子が、「自分も!」と次の遊びの当事者になっていき意欲や態度を育てていくことが期待できる。他にも、保育ドキュメンテーションをまわりの人が読む(見る)ことで対話と学びが生まれるとしている。

以下の一覧は保育ドキュメンテーションの作成で考えるときの過程を「問い」と「答え」でまとめた例であり、作成時のヒントにしてもらいたいと記されている。

	何を やったのかの 記録	基本型の保育 ドキュメンテーション ○△	進展型の保育ドキュメンテーション ○△□☆
	子ども理解		
	エピソード記録		
	保育の省察や計画		
問い	○その子ども(たち)は、どんな活動をしたの?	△子ども(たち)は、具体的に何をしていた?何を感じ、考えていた?何を欲していた?	□その子(たち)にはどんな心・力がある?育っている? OR「なぜ私は」このシーンに驚いた?
答え	どこで何をしたのかなど、簡単な「事実」だけを書く。 例) ビニール袋の水で遊んだ。	個々の具体的姿と簡単な読み取りを書く。 例) 水をじっと見ていた「不思議だ」と思っていたのかも。	読み取りのもとになった深い気づきを書く。 例) 興味を持つ力が育っている(だから「不思議」と思ったのかも)。 OR 私は「その子に興味を持つ力が育っている」と考えたから、私は驚いたんだ!
			☆その子(たち)の育ちを、私は支援できたか? それをもとに、次は何を計画しよう?
			環境設定やかかわりを考えて書く。 例) 水という素材をビニールに入れることで、興味を引き出せた(支援)。色水遊びをしてみよう、ジョウロも用意しよう(計画)。

表1 4つの問をもとに書く保育ドキュメンテーション ※「日本版保育ドキュメンテーションのすすめ」より

本研究では、ドキュメンテーションを活用して、園児達へこれまでの活動が次の活動につながっていくことが分かるように掲示し、期待感や見通しをもてるようにする。また、活動をいつでも振り返られるようにし、分かったこと、気付いたこと等を確認できるようにしたり、グループの友達と協力する楽しさを感じら

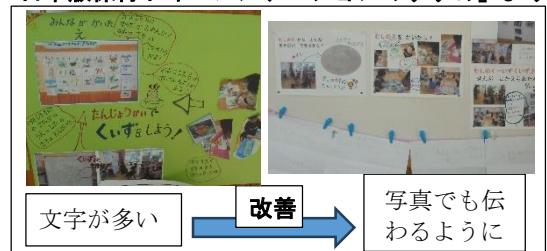


図4 ドキュメンテーション

れるようにしたりして、園児が意欲的に活動に取り組めるよう支えていく。

## IV 保育実践

### 1 検証計画

実践	日	○ねらい ・内容	○保育者の援助 ・環境構成
1	12/13 (水)	○昆虫について知っていることを発表したり、絵に描いたりして楽しむ ・昆虫について知っていることを発表したり、画用紙に昆虫の絵を描いたりして楽しむ。	○昆虫の写真を準備し、必要に応じて掲示していくことで園児が思い出せるようにする。 ○描き終えた園児の絵を壁に貼っていく。 ・昆虫の写真 ・昆虫図鑑や昆虫に関する絵本
2	12/14 (木)	○昆虫の絵を見て気付いたことを発表する。 ・絵から気付いたことを発表し、伝える喜びを味わう。	○園児が発表したことに共感を示し、発表する喜びを味わえるようにしながら、学級全体でも共有できるようにしていく。 ○友達の発表を聞くことで、自分とは異なる色々な考え方や見方があることに気付けるようにする。 ・みんなの絵の掲示、昆虫図鑑や昆虫に関する絵本
3	1/11 (木)	○昆虫について分かったことや絵を使って遊びができないか話し合う。 ・園生活で遊んだ経験を振り返り、どんな遊びができるかみんなで考える。	○これまでの経験してきたことを生かして遊びができないか話し合いの場をつくり、園児が提案しやすい雰囲気を作る。 ○園児の考えをウェブングにして書き出し、みんなで確認ができるようにする。 ・ボードとペンを準備 ・活動をドキュメンテーションにして掲示
4	1/12 (金)	○クイズに出す虫の種類やグループ決めを話し合っで決める。 ・クイズの問題に使う虫やグループ決めを友達と相談しながら決める。 ・昆虫について知っていることを話し合う。	○園児達が関わってきた虫には何がいたのか問いかけたり、虫の写真をボードに掲示したりして振り返られるようにする。 ○クイズに使う虫やグループ決めを、園児同士話し合っで決められるように見守り、相手の思いにも気付けるようにして支えていく。 ・虫の写真、磁石、ボードの準備
5	1/15 (月)	○グループの友達と協力してゲームを進め楽しむ。 ・グループの友達と話し合っで言葉を決めたり、マスに文字を書いたりしてゲームを楽しむ。	○保育者も用紙を掲示し、やり方を示しながら進めていく。 ・ビンゴゲームで使う用紙や鉛筆、消しゴムの準備 ・クイズの問題で使う虫の写真、グループ表の掲示
6	1/16 (火)	○グループの友達と協力して、クイズの問題を考える。 ・自分達の選んだ虫の中から、クイズの問題を考え友達へ伝え合い、相談しながら、一緒に問題をつくる。	○園児がゲームの問題づくりを具体的にイメージできるようにクイズを披露する。 ○園児達が知っていることをクイズの問題にできるように、問いかける等して、考えがまとまるようにする。 ・問題に使う虫の写真、グループ表の掲示 ・クイズの問題を書き記す画用紙と鉛筆、消しゴムの準備
7 検証 保育	1/17 (水)	○グループの友達とクイズの内容や出し方について話しう。 ○身近な材料を使い友達と工夫したり協力してクイズに使う小道具を作る。 ・自分達がつくった問題から、質問や答えの出し方などを考える。	○自分達で相談し、役割分担をしながら小道具づくりを進められるようにする。 ・クイズゲームの小道具を作る材料の準備 ・ドキュメンテーションの掲示
8	1/18 (木)	○誕生会で年中、年少児にクイズ披露し一緒に楽しむ。 ・グループの友達と協力しながらクイズを進める。	○つくったクイズの問題で年下の友達が楽しめるようにどうした良いか問いかけ、相手を意識してゲームを進められるようにえ援助する。 ・クイズに必要な小道具をグループ毎にまとめて置いておく。

## 2 検証保育

(1) 日 時：令和6年1月17日（水） 午前10時15分～11時

対 象：石垣市立あらかわこども園 5歳児ゆり組：男子17名 女子11名 計28名

活動名：友達と一緒にクイズをつくって遊ぼう

(2) ねらい ・グループの友達とクイズの内容や出し方について話し合う。

・身近な材料を使い友達と協力してクイズに使う小道具を作る。

(3) 活動について

### ① 教材観

本学級の園児は、4月から園庭で出会う蝶の幼虫やさなぎ等の生き物に興味を持って観察したり、新たな発見をしたりする等、身近な生き物に触れて楽しんできた。その中で、粘土で幼虫や卵の模型を作ったり、空き箱などで虫を作ったりして遊ぶ姿があった。また、最近では、植物にも関心が高まり、植物のクイズづくりを楽しんでいた。これらの経験を発展させて「何か遊びを楽しむことができないか」と話し合い、園児の考えた遊びをウエビングマップに書き出すと今度は「虫でクイズづくりがしたい」と意欲的な声があがった為、本活動を設定した。クイズを考える活動の際には、グループで話し合ったことを紙に書いたり、製作したりするなどして協同で作り上げることを意識させたい。また、持っている知識を出し合っってクイズの内容や発問の仕方などを考えたり工夫したりしながら話し合いが進められるようにする。クイズを披露して学級で遊び、さらに「誕生会」で年中、年少の園児にクイズを出して楽しませるといった目的に向かい協力して活動し、充実感を持ってやり遂げられる教材であるとする。

### ② 園児観

本園の園児は、友達と関わりながら協力して遊ぶ子も多いが、中には、友達や保育教諭に自分の思いを伝えられない子や一緒に行動することが苦手な子もいる。そこで、クイズづくりを通して、友達と一緒に活動することの楽しさを味わえるようにしたい。また、グループで試行錯誤しながら話し合ったり、製作したりする場を重ねることで友達との関係性を築き、一人では成し遂げられない喜びにつながっていくと考える。活動を通して共通の目的に向かって協力したり、折り合いをつけたりすることの大切さを考えさせたい。自分達で作ったクイズを年下の友達に披露し、楽しんでもらうことで、充実感や達成感につながると考える。

### ③ 指導観

園児の興味や関心を生かした身近な生き物を使ってクイズをつくり遊ぶ活動である。保育の際には、園児がグループの友達とクイズの内容や発問の仕方を話し合いながら、子ども達自身が自分の考えを伝え合えるように援助していく。園児が必要とする物は、自分達で考えてすぐ使えるように材料を準備しておく。また、クイズを楽しめるよう園児と共に雰囲気作りに努める。活動の過程を、ドキュメンテーション等で「見える化」し、園児が活動を振り返ったり見直しをもったりすることができるようにしていく。

### (4) 本時の指導(7/8)

令和6年 1月17日（水） ゆり組（5歳児）：男児17名 女児11名 計28名			
園児の姿	<ul style="list-style-type: none"> <li>生活発表会に向け、自分なりに目当てを持ち、友達と協力して、取り組む姿が見られる。</li> <li>朝の活動や好きな遊び、片付け等自信をもって、園生活を進める姿が見られる。</li> <li>園庭の生き物に関心を持ち、見つけると捕まえたり、観察したりして楽しむ姿が見られる。</li> </ul>		
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>グループの友達とクイズの内容や出し方について話し合う。</li> <li>身近な材料を使い友達と協力してクイズに使う小道具を作る。</li> </ul>	研究仮説	<ul style="list-style-type: none"> <li>グループでお互いの考えを出し合い、試行錯誤しながらやり遂げる活動を設定することで協同性が生まれ、友達と協力し合っって遊ぶ園児が育つであろう。</li> </ul>



時間	予想される活動	◎保育教諭の援助 ☆環境構成
10:15	○〈友達と一緒にクイズをつくって遊ぼう〉 ○集まり ・「クイズづくり」について話を聞く。	◎今日の活動の流れを話し、友達と協力して、一緒に活動を進めていけるようにする。 ◎明日の誕生会で年下の友達をクイズで楽しませるにはどうしたらよいか、みんなで共通の目的をもてるようにして進めていく。
10:18	○グループでの話し合い ・前日に作ったクイズを振り返る。 ・クイズの出し方について話し合う。 ○「クイズづくり」小道具製作 ・写真や画用紙等、必要な材料を使って、小道具を作る。  ・製作が完成したグループは、互いにクイズを出して楽しむ。	◎子ども達を中心になって話が進められるように見守り、必要な際は、保育者が問いかける等して自分の考えを伝えられるようにする。 ◎子ども達から出てきた考えを大切に、協力して活動しているか見守り、時には、友達の考えを伝えながら、お互いの良さに気付けるようにしていく。 ☆園児が自分達で考えたクイズを完成させるには、何が必要か考えたり、アイデアが広がったりするような材料を十分に準備しておく。
10:45	○片づけ ・グループの友達と協力して片づける。	◎園児同士と一緒に考えを出し、協力しながら製作を進めていけるように、同じ問題を作っている友達の様子を知らせる等して援助していく。 ◎明日の誕生会に向けて、これで良いのか自分達で決め、足したいこと等があれば再び作っていけるようにする。
10:50	○活動の振り返り ・本時の活動を振り返る。 ・明日の誕生会について話を聞く。	◎片付けの援助は、自分達でできるように見守り、必要に応じて声をかける。 ◎今日の活動の取り組みの中で、楽しかったことや素敵だなと思ったこと等を発表する。 ◎明日の誕生会に向けて園児が期待をもてるようにする。
環境の構成	<div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">製作材料</div> <div style="text-align: center;">(前)</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">掲示物</div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center; margin-top: 10px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">写真・画用紙</div> <div style="text-align: center;"> <p>● テーブル</p> <p>● 床の上で製作をするグループの場所</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>・グループ表</li> <li>・本時の活動の内容</li> <li>・ドキュメンテーション</li> </ul> </div> </div> <div style="margin-top: 10px;"> <p>●…保育教諭</p> <p>■…支援員</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 5px;"> <p>製作材料</p> <p>はさみ、のり、クレヨンペン、セロテープ、ガムテープ、画用紙、棒、割りばし、廃材等、写真、画用紙</p> </div> </div>	
評価	検証項目	検証観点
	環境構成	<ul style="list-style-type: none"> <li>・園児が製作に必要な材料の準備と使いたくなるような工夫があるか。</li> <li>・園児が、互いの意見を大切にしながら、協力して作ることができるような場ができているか。</li> </ul>
	教師の援助	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保育教諭は、園児らの思いや考えを大切に、園児同士の関わりを支えていくことができたか。</li> <li>・保育教諭は、個々の園児を支えながら、友達と協力して活動が進められるように援助ができたか。</li> </ul>
	園児の姿	<ul style="list-style-type: none"> <li>・クイズの出し方について、みんなの考えを大切にしながら、進めている姿がみられたか。</li> <li>・友達へ思いを伝えながらクイズの小道具を協力して作る姿があったか。</li> </ul>

## (5) 保育研究会の記録

- ・園児達が落ち着いて席についていた。蝶の食草の環境が整えられており、良い題材だと感じた。
- ・一人一人の園児が取り組む活動を理解し、自分なりに考え、進めている姿があった。
- ・同じグループの友達と小道具づくりについて自分の考えを伝え合い、役割分担をしながら完成させる姿が見られた。
- ・出来上がった小道具を集めて問題をどのように披露するか、友達に相談しながら試している姿が見られた。

## (6) 指導助言

- ・園児が自分の活動に集中していたので、もう1時間あるとお互い見せ合って学級でも楽しむことができたと思う。
- ・活動の振り返りでは、小道具等の出来具合や工夫したこと等を園児に発表させると良かった。
- ・遊びの中で協同性を育む場面はたくさんあるので日頃から取り組むことが大切である。

# V 研究の考察

## 1 研究仮説の検証

グループでお互いの考えを出し合い、試行錯誤しながらやり遂げる活動を設定することで協同性が生まれ、友達と協力し合って遊ぶ園児が育つであろう。

### (1) お互いの考えを出し合い、試行錯誤しながらやり遂げる活動の場と協同性について

#### ① 見方・考え方

園児達は、4月から身近な環境にある虫に興味をもって関わり親しんできた。

2学期の後半には、植物にも関心が広がり、植物クイズをして楽しんだことから、今度は更に興味や関心のある虫のクイズをやってみたくて意欲的な声があがり、学級のみんなで話しあった結果、虫のクイズをつくって遊ぶことになった。

園児らは、これまで興味をもって関わってきた虫に関する知識等を思い出し、諸感覚を働かせながら、グループの友達と虫のクイズづくりに意欲的に取り組んでいこうとする姿が見られた。

この取組は、幼児期の教育における見方・考え方を生かした活動であり、環境から得た知識を自分達の生活の中に取り込み、遊びが広がった経験の一つになったと思われる。

#### ② お互いの考えを出し合い試行錯誤しながらやり遂げる活動

クイズの問題づくりでは、グループの友達とどんな問題にするのか互いの考えを出し合いながら決めていく姿が見られた。アゲハチョウの問題づくりをしていたグループで、「アゲハチョウの蛹の問題にする?」「幼虫がいいんじゃない。何色でしょうか?はどう?」「緑色だね。でも、緑色の前は鳥のうんちを真似てるから、その問題がいいと思うよ」と、お互いの考えを出し合い話し合っ

てクイズの問題を決めることができた。

園児らの活動する姿から、より良い問題を作りたいと互いの考えを伝え合い、試行錯誤しながらやり遂げることができた取り組みであったと考える。



写真1 遊びを考えよう



写真2 クイズの問題をつくらう

また、園児達は、虫のクイズづくりを通して更に興味や関心が高まり、身近な虫を見つける  
と捕まえて観察したり、図鑑で調べたりして分かったことを周りの友達に伝える等積極的な行  
動が見られ、知識も増え学びの芽が育ってきている。

### ③ 折り合いをつけながら活動に取り組む

クイズの問題づくりでは、グループで話し合っ  
て決まったクイズの問題を園児達は用紙に書  
いていた。あるグループでは、文字が書ける  
子が数名いて、「どうしても私が書きたい！」  
と主張し、思い通りにならなかったことか  
らイライラしてグループの話し合いに参加  
できない園児がいた。そこで、相手の女児  
が「2つ問題があるから、1つずつ書こうか」  
と提案したことで、双方とも自分の思いが  
叶って書くことができ、グループの友達と  
問題づくりを進めることができた。このこ  
とから、主張の違いを自分達で折り合いを  
付け、同じ目的に向かって活動に取り組ん  
でいくことができたのではないかと思われ  
る。

## (2) 友達と協力し合っ て遊ぶ園児について

### ① 年中、年少の友達へクイズを披露して一緒に楽しむ

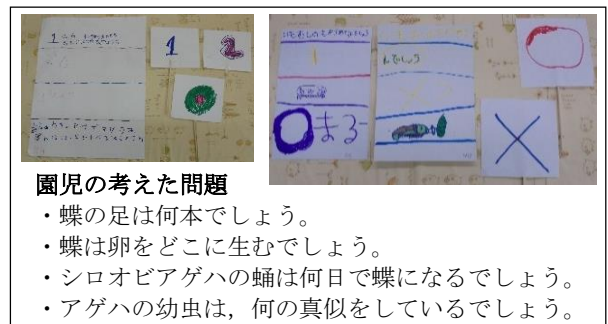
自分達で作ったクイズを年中、年少の  
友達へ楽しんでもらおうとグループの友  
達と協力して遊ぶことができた。まずは、  
クイズの問題を聞いている友達が分かる  
ようにと、声を揃えて伝える姿や小道具  
を順番良く出して正解を伝えることを  
楽しみにして進めている姿が見られた。  
自分達でつくったクイズに自信を持ち、  
披露する喜びを味わうことができた。ま  
た、クイズの正解を伝える際に、1と2  
の数字を使って行ったグループで、2問  
とも正解が1番であったこと



写真3 クイズで遊ぼう

ことで、2の数字を持つ役割の子が「こんなやり方ならおもしろくない」「やりたくない」と自分の気持ちを発していたがクイズは止まることなく進んでいった。しかし、次第に自分の気持ちを切り替え、自分の役割を最後まで果たしグループの友達と協力しながら遊ぶことができた。

園児達に、周りの状況等を見て、自分の気持ちに折り合いを付けながら友達とやるべきことを果たす姿に、協同的な育ちを見ることができた。クイズを進める園児らの生き生きとした姿から充実感や達成感を味わうことができたのではないかと思われる。



園児の考えた問題

- ・蝶の足は何本でしょう。
- ・蝶は卵をどこに生むでしょう。
- ・シロオビアゲハの蛹は何日で蝶になるでしょう。
- ・アゲハの幼虫は、何の真似をしているでしょう。

図5 園児がつくったクイズの問題と小道具（一部）

### ② 共主体

クイズの小道具づくりで、あるグループがミツバチの問題づくりを決めて進めていた。しかし、周りのグループが蝶の問題づくりをしており、扱う虫が同じでないことから、不安になり活動が止まっていた。そこで、面白いのができそうなことや絵本や図鑑を見て参考にしてみてはどうか等を伝えたところ、図鑑からヒントを得た園児がグループの友達に「ハチの巣のことを問題にしたらどうかな」と提案したことで、他の園児も「やってみよう」と主張が一致し、イメージが具体化したことでグループで協力し合っ  
てつくることができた。他のグループとは異なり、段ボールにハチの蜜をいれる部屋を描いたアイデアが見られた。また、友達が描きやすいように、段ボールを押しさえてあげたり、「ここにハチの絵を描いていい？」と自分の考えを伝えながら描き足していく等、相談して完成させることができた。



写真4 主体性の不一致を解決

園児の「ミツバチの問題ではやりたくない」という主張と保育教諭の「ミツバチの問題でやってほしい」という主張の不一致があったが、園児のやりたくないという主張を受け止めながら子どもの最善の利益を考え、園児の思いに寄り添い、安心できるような言葉をかけたりして主体性の一致を図った。また、対話によりイメージを膨らませていくことで園児達の意欲を引き出し協力し合いながら小道具をつくり完成させることができたことは、充実感を味わった活動となったのではないと思われる。

## VI 研究の成果と課題

### 1 成果

- (1) 友達と関わって遊ぶ場の設定をしたことで、自分の思いを伝えたり、友達の気持ちも考えたりしながら自分達で折り合いをつけてやり遂げようとする姿が見られた。
- (2) ドキュメンテーションを見て、園児が活動を振り返ったり姿や次の活動を自分事として捉えたりすることで、意欲的に参加し、グループの友達と最後までやり遂げる姿へとつなげることで折り合いができた。
- (3) 同じ目的に向かって活動を進める中で、グループの友達と試行錯誤しながらも実現させようとする過程を丁寧に捉え適時に援助をしたことで、自分たちで折り合いを付けながら問題を考えたり、協力してクイズの小道具を仕上げたりする等、友達と一緒に遊びを展開する楽しさを味わうことができた。
- (4) 虫に関する興味や関心が更に高まり、積極的に観察したり図鑑等で調べたりして分かったことを友達に伝え合う等学びの芽が育ちつつある。

### 2 課題

- (1) 効果的なドキュメンテーションの作成と活用の工夫
- (2) 協同性を育てる遊びの継続と工夫
- (3) 「共主体」の理論を生かした、対話による保育の工夫

#### 《参考文献》

- 無藤隆 2018 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領ハンドブック』 学校教育みらい
- 無藤隆 2018 『幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿』 東洋館出版社
- 木下光二 2021 『これからの遊びと学びをつなぐ保幼小接続カリキュラム』 チャイルド本社
- 高山静子 2023 『改定 保育者の関わりの理論と実践』 郁洋舎
- 無藤隆/大豆生田啓友 2020 『3・4・5歳児の子ども姿ベースの指導計画』 フレーベル館
- 大豆生田啓友/おおえだけいこ 2023 『こどもが中心の「共主体」の保育へ』 小学館
- 大豆生田啓友/おおえだけいこ 2021 『日本版保育ドキュメンテーションのすすめ』 小学館
- 神長美津子/堀越紀香/佐々木晃 2023 『保育内容 環境』 光生館
- 内閣府/文部科学省/厚生労働省 2018 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』 フレーベル館
- 神長美津子/岩立京子/岡上直子/結城孝治 2023 『幼児理解の理論と方法』 光生館

#### 《参考URL》

- 文部科学省 2021

『幼児教育の基本となる乳幼児の発達と遊びと学びの特徴』

[https://www.mext.go.jp//content/20210720-mxt\\_youji-00001694](https://www.mext.go.jp//content/20210720-mxt_youji-00001694)

- 文部科学省 2021

『幼児教育の独自性を踏まえた評価の具体的な在り方についての研究』

[https://www.mext.go.jp/content/20210423-mxt\\_youji-000014566\\_12.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210423-mxt_youji-000014566_12.pdf)